

〈実践研究〉

「生きる力を育む生活単元学習の充実」

— ご飯の炊き方, カレー作りを単元とした授業をもとにして —

高橋 幸子*・西迫しのぶ*

本論では、生活単元学習におけるご飯の炊き方とカレー作りを単元とした授業について紹介した。本学級内には、聴覚障害、視覚障害、重複障害、知的障害、自閉症それに軽度発達障害と多種多様の障害カテゴリーのある児童10名が在籍している。ユニバーサルデザイン化した取組により、授業は聴覚障害者用手話、手話に近い身ぶり、絵や写真カードを同時に使用しながら行われ、児童相互の助け合いや自己評価を各児童が可能なコミュニケーション手段によって行われた。障害児にとって、生活単元学習は基本的な生活習慣の確立のために必要なものであり、ユニバーサルデザイン化された授業を行い、それぞれの特性にあったコミュニケーションスタイルを授業で日常的に使用することによって、自己調整能力、知識の獲得、自己肯定感、意欲や達成感を得ることができた。

キーワード：生活単元学習、ユニバーサルデザイン化した授業

I. 学校・学級紹介

本校は、三原市の中心部に位置し、市の中で最も古く130数年の歴史をもつ学校である。平成16年度の在籍児童数は、364名で各学年2学級ずつ通常の学級12学級に、障害児学級（知的障害学級と情緒障害学級）2学級の計14学級で構成されている。

学校の経営方針として：・自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる力を培い、友だちとともに生きぬく子どもを育てる。・子どもの良さを伸ばし、友だちの良さに学び合い、学校の良さを地域とともに創る。・めざす児童像「自ら学び、心豊かでたくましい三原っ子」
1. 考える子ども（豊かな学力）—自ら考え、判断して行動する子ども 2. 思いやりのある子ども（豊かな心）—生命、自然、文化を大切に子ども 3. きたえあう子ども（健やかな育ち）—健康で、友だちとともに伸びる子どもをあげている。

本校では、定期的に教育研究会が開催されており、本年度は第25回目の研究会が開催された。学校全体の研究テーマは、「豊かな心と確かな学力を育成する授業の創造」～自己肯定感を育む学習指導と評価の充実をめざして～であり、研究の仮説として、「指導方法の効果的な工夫を図るとともに、児童が自己を肯定的にとらえる学習の場を設定し、児童の意欲や達成感を

育てる評価を行うことにより、豊かな心と確かな学力を育成する授業を創造することができるであろう。」とした。仮説検証の視点として、「視点1 確かな学力を育てる授業改善がなされたか。視点2 単元や授業において、自己肯定感を育む学習活動の場を設定することにより、児童の変容が図られたか。」を設定している。

本論文は、第25回教育研究会に向けて公開された授業ならびに要項に記載された報告をもとに作成された。

障害児学級在籍児童の紹介：A（1年）：自閉的傾向があり、文字・数字はおぼえているがコミュニケーションは困難。B（1年）：高機能自閉症の疑いがあり、良く話すがソーシャルスキルの問題と声の調整が難しい。C（1年）：自閉的傾向があり、いくつかの要求言語はあるが、コミュニケーションが取りにくい。D（3年）：知的障害と構音障害があり、音声言語によるコミュニケーションが困難だが、手話を補助的に用いている。E（4年）：知的障害、音声言語によるコミュニケーションが可能。F（4年）：視覚障害と知的障害を合わせもつ。G（4年）：自閉的傾向があり、反響言語はあるが会話になりにくい。H（5年）：中等度の難聴があり、1対1であれば会話ができるが集団では困難なこともある。I（6年）：軽度の知的障害がありコミュニケーションには困らない。J（6年）：自閉的傾向が強く、発話はないが通常使用する音声言語については、ほぼ受信可能であり、発信は日常的内容については20～30の手話の活用でコミュニケー

*広島県三原市立三原小学校

ションを行う。以上のように、聴覚障害、視覚障害、重複障害、知的障害、自閉症それに軽度発達障害のある子ども達が10名在籍しており、指導方法に工夫が必要であった。

II. はじめに

障害を持つ子どもたちにとって、学校は、様々な問題と直面しながらも地域社会で共に生きることを目指しながら、主体的に生きていく力を付ける場である。その「生きる力」を培うためには、卒業後の進路を展望し、子どもたち一人ひとりのニーズを把握し必要な支援を行う必要がある。そして、子どもたちの能力や可能性を最大限にのばし、個々の具体的なニーズに応える教育を行うことが重要だと考えている。

本サークルでは、「生きる力」を育むためには、

- (1) 基本的な生活習慣の確立に向けての支援
- (2) 自ら考え選択し行動しようとする意欲や態度の育成
- (3) 社会参加に向けて人間関係を結び広げていく力の育成

が重要であると考え、「生活単元学習」を教育課程の中心に位置づけ、様々な学習活動を行っている。

「生活単元学習」は、学習活動を教科別などに分けないで統合化し、生活化して指導する領域・教科を合わせた指導の形態である。単元は実際の子どもたちの

生活から発展し構成する。そのため、子どもたちが社会の中で生活するためにはどんな力が必要かという視点から目標や内容を考えられやすく、子どもたちの実際の生活にも結び付けやすい指導の形態である。

本学級の児童は、障害の状況が様々で、生活面も学習面もその力には個人差が大きい。そんな個人差を超えて、それぞれの子ども達に、「できたよ。」「できるようになったよ。」と言える経験をさせることは、「自己肯定感を育む」上で大変重要である。生活単元学習では、そのような学習が仕組みやすい。10人それぞれの力を発揮させながら、生活に結びついた学習をしていき、一人ひとりの「自己肯定感」を育てることがすなわち「生きる力」を育むことにつながると考える。

そこで、本年度の研究テーマを「生きる力を育む生活単元学習の充実」とし、本学級の学習活動の中心である生活単元学習の充実を図りたいと考えた。子どもたちが授業の中で興味・関心・意欲をもつことができ、満足感や成就感を味わい、自らの経験の積み重ねや他から認められることによって自信を持ち、次の活動への意欲につながっていくような学習にしていくために、本年度は次の2点に検証の視点をおきながら考察し、指導のあり方について研究を進めていく。以下、6月3日の授業(資料 生活単元学習指導案①参照)と10月1日の授業(資料 生活単元学習指導案②参照)の取組を中心に、検証と考察を行っていく。

III. 授業の実際

(資料)

生活単元学習指導案①

指導者 西迫 しのぶ
高橋 幸子

- 1 学年 ひまわり学級1組・2組 10名
- 2 日時 平成16年6月3日(木) 5校時 家庭科室
- 3 単元 「みんなであつこう!おいしいごはん!

～ごはんの炊き方を1年生に教えてあげよう～

4 単元について

- 食生活が多様化している現在であるが「ごはん」(お米)は私たちの生活に欠かすことのできない主食である。学校給食でも週に2回がご飯を使った献立となっている。ごはんは、大変身近で食生活の中心となる重要な食べ物である。

食べ物としての「ごはん」(米)は、そのまま食べてもよく、ふりかけなどの補助食品で味を大きく変化させたり、寿司やカレーライス、チャーハンなど献立によって様々に姿を変えたりする変化に富んだ魅力的な食材である。また、調理についても、炊飯器を使えば比較的調理しやすいという利点がある。

一方植物としての「米」(稲)は、日本中の田んぼで育てられ、ここ三原市でも多く育てられている大変身近な食材である。

そのような「米」を自分たちで調理し「おいしいご飯」を炊いたり、「ご飯」を使った料理に触れたりす

ることは、これからの食生活における重要な経験になり、「ご飯を炊けること」は自立へ向けての大きな力となる。また、「米」を調理することは「食」に関する楽しい経験であり、食生活への関心を高めてこれからの生活を豊かにしていくことにつながる。

そこで「みんなでつくろう！おいしいごはん！」という単元を設定し、子どもたちにとっての、楽しく生活に結びつく「食」経験を増やしていきたいと考えた。

- 本学級の子どもたちは、昨年度からこの大単元に取り組んでいる。昨年度は、おにぎりを持って遠足に行くという楽しい経験をまず行うことにより、このおにぎりはどうやって作るのか ということに関心を持たせ、米作りへの動機付けにした。そして、ごはんを炊くことに数回取り組み、「キャンプカレー」（炒めず煮込むだけのカレー）にも挑戦した。しかし自信をもって炊けるところまではいたっていない。また、バケツで稲も育て、脱穀・粳摺り・精米も手作業で行った。その結果、精米してみても初めて、育てた稲とおにぎりやカレーの材料である米との関係に気づけたという子どももいた。

そこで、今年度も引き続き、この単元に取り組んでいくことにした。もう一度取り組みを繰り返し、発展させることにより、子どもたちの認識はより確かなものになると思われる。自信持つてできることも増え、「おうちカレー」（炒めてから煮込むカレー）にも挑戦したいという子どもたちの願いもかなえられるであろう。今年度は、地域の方が田んぼを提供してくださり、本物の田植え・稲刈りも体験できることになった。このことは、昨年度の学習をより深めることにつながると考えられる。

- 本単元を学習するにあたっては、昨年度の活動を繰り返す場面が多いので、今年度入級してきた3人の1年生に教えてあげようとして投げかけ、取組の意欲づけにしたい。また、長期間の活動になるので、常に「おいしいご飯が炊けるようになろう。」という目標の意識付けを明確にしていきたい。米作りの方も、子どもたちが興味・関心・意欲を持つことができるよう、今年度も導入は、おいしいおにぎりを食べる「おにぎりパーティ」を開くことから、「おにぎりの材料であるおいしいお米をいっぱい作りたい」という児童の意欲が生まれるよう単元構成の工夫をしていきたい。

小単元としては「ぼくたちの稲を育てよう！」「おいしいご飯をたこう！」「おいしいカレーをつくろう！」などの単元を組み、児童の学習に広がりをもたせ、児童が満足感や成就感を味わい主体的な学習につながるようにしたい。また、一人一人の実態を基にした個別指導案を導入し個に応じた支援を工夫していく。

学習の中では、子どもの様々な実態から、音声言語と同時に動作や手話・表情など理解の助けとなる視覚的な補助手段を使っていきたい。また、小グループでの活動を取り入れ、子ども同士が学び合う場を確保し、子どもの気持ちや思いを教師が媒介することで、子ども同士を関わらせていきたい。また、自分のいいところ・友だちのいいところに気づかせる教師の言葉かけを大切にしていきたい。ワークシートへの記入や学習後の振り返りなどを行い、短い区切りの中で自らを振り返る経験を重ね、自分を振り返るという経験をさせていきたい。

また、調理などの場面では、衛生面を充分配慮して指導していきたい。

- 5 単元の目標 （「単元における個別の目標」は別紙1参照）
 - 米作りの活動を通して稲の成長の様子に気づき、米についての理解を深める。
 - 炊飯やカレー作りを通して、食材を知ったり、道具を使う仕事に触れたりする。
 - 「お米」「ご飯」「カレー」などの出てくる本や資料に親しみ、自ら調べたり学んだりすることの大切さや楽しさを知る。
 - 友だちと協力して、ご飯を炊いたりカレーを作り、米を収穫する。
 - 田んぼの探検や買い物などで地域にでかけ、地域の人とふれあう。

- 6 単元計画
(別紙2 単元計画「みんなで作ろう！おいしいごはん！」を参照)

- 7 本時の目標
 - 友だちと協力し進んで炊飯に取り組む。
 - 炊飯に必要な食材や道具に触れ、その使い方に慣れる。
 - 炊飯の順序を思い出し、水の量にも気をつけて炊くことができる。(1年生は、炊飯に関心を持つ。)

- 8 準備物
米 ザル ボール 炊飯器 計量カップ 歌詞カード 絵カード パネル 順番カード

9 学習過程

学 習 活 動	指導上の留意事項 (○)・評価 (評)・方法【 】 自己肯定感を育む視点 (★)
<p>〈課題をつかむ〉</p> <p>1 前時を想起し、本時の活動を確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; text-align: center; padding: 2px; margin: 5px 0;">おいしいごはんを炊こう</div> <p>2 「ごはんの歌」を歌う</p> <p>〈課題を追求する〉</p> <p>3 ごはんの炊き方の絵カードを順番に並べ、手順を確認する。</p> <p>4 小グループに分かれて材料と道具を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水・ザル・ボール・計量カップ ・炊飯器・米 <p>5 炊飯の作業を実際に行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を量る。 ・米を研ぐ。 ・水を入れる。 <p>6 片付けをする。</p> <p>〈自己を高める〉</p> <p>7 本時の活動をふりかえる。</p> <p>〈次時の予告〉</p> <p>8 次の時間の活動を 確認する。</p>	<p>○前時が想起できるような資料を提示する。</p> <p>評個人の目標に沿って、材料や道具を確認できたか。【観察】</p> <p>○見通しをもって作業に取り組めるように、パネルを提示しておく。順番に作業しやすいように順番を示すカードも用意する。</p> <p>評個人の目標に沿って米を量ることができたか。【観察】</p> <p>★作業は一つひとつ確認しながら進めていき、できたことを認め合っていく。</p> <p>★子どもどうしが作業を見合ったり、友だちのがんばりに気づくことができるように声かけをしたり作業を見合う場を作り学び合い高めあっていく。</p> <p>評友だちと協力して一つひとつの作業をやり切れたか。 【観察】</p> <p>評友だちと協力して、最後まで片付けられたか。</p> <p>★作業内容についてがんばったところ、難しかったところ、友だちが工夫していたところなどを中心に話し合い、互いのがんばりを認め合えるようにする。</p> <p>評友だちや自分のがんばりを振り返ることができたか。</p>

《単元における個別の目標》

(別紙1)

児童	目標 (1組4名 2組6名)
D (3年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称がわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に慣れる。 ○友だちや先生の作業の様子を見ながら、進んで炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○自分の役割を意識して友だちと協力して活動できる。
E (4年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称がわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に慣れる。 ○友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○自分の役割を意識して友だちと協力して活動できる。
F (4年)	<ul style="list-style-type: none"> ○食材に触れながら米や野菜のいくつかの名称がわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に慣れる。 ○今何をしているかを確認しながら、炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○友だちの言葉かけに応え、自分の方法で協力して活動できる。
H (5年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称を理解し、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方を調べ理解する。 ○炊飯・カレー作りに見通しを持ち、自分の力で最後までやりきる。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づき自分で調べたりまとめたりしようとする。 ○小グループのリーダーとして低学年に教えたり、グループをまとめたりすることができる。
A (1年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜(人参・じゃが芋・玉葱)の名称がほぼわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に興味を持つ。 ○友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○友だちの言葉かけに応じて、活動できる。
B (1年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜(人参・じゃが芋・玉葱)の名称がわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に興味を持つ。 ○友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○友だちの言葉かけに応え、順番を守って活動できる。
C (1年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜(人参・じゃが芋・玉葱)の名称に関心を持つ。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に興味を持つ。 ○友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○友だちの言葉かけに応じて、活動できる。
G (4年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称がわかり、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に慣れる。 ○絵カードを見て次に何をするのかを確認し、友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○友だちの言葉かけに応え、自分の方法で協力して活動できる。
I (6年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称を理解し、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方を調べ理解する。 ○炊飯・カレー作りに見通しを持ち、自分の力で最後までやりきる。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づき、自分で調べたりまとめたりしようとする。 ○小グループのリーダーとして低学年に教えたり、グループをまとめたりすることができる。
J (6年)	<ul style="list-style-type: none"> ○米や野菜の名称の手話を覚え、材料を選ぶことができる。 ○ごはんの炊き方や、カレーの作り方に慣れる。 ○次の作業を意識しながら何をするのかを確認し、友だちや先生の作業の様子を見ながら炊飯・カレー作りに取り組む。 ○米作りを体験し、稲の成長に気づく。 ○小グループのリーダーとして、補助してもらいながら低学年に教えたり、グループをまとめたりすることができる。

(別紙2)

《単元計画 「みんなで作ろう!おいしいごはん!」(全110時間)》

	学習活動	学習のねらい	支援と評価
第一次	<p>◎ようこそ1年生!～おにぎりパーティを開こう!～(4)</p> <p>◎1年生においしいご飯の炊き方を教えてあげよう!(10) 本時2/10</p> <p>○一番おいしいごはんはどれ?</p> <p>◎ぼくたちの稲を育てよう!(44)</p> <p>探検!発見!でっかい田んぼ! 本物の田んぼを見に行こう!</p> <p>○種籾を育てよう! ○田植えをしよう! ○稲を観察しよう!</p> <p>○稲を守ろう!</p>	<p>◎おにぎりを作ってみんなで食べるという楽しい経験を通して、材料の米に関心を持つ。</p> <p>◎昨年の学習を振り返ると共に、基本的な調理器具の使い方に慣れる。(1年生は調理用具の使い方を知る。)</p> <p>○水の量を意識してご飯を炊く。</p> <p>◎お米は稲から取れることを知り、田んぼを観察したり、稲を育てたりする中で成長に気付き収穫の喜びを味わう。</p> <p>○地域の人など、いろいろな人とふれあう機会とする。</p> <p>○種籾を育てることに興味を持ち、自分の種籾の世話をする。</p> <p>○土に触れ、田植えを経験する。</p> <p>○稲を育てることに興味を持ち、育つ過程を観察する。</p> <p>○友だちと協力して、鳥よけやイノシシよけを作る。</p>	<p>○楽しい活動で導入することによって学習への意欲を高める。</p> <p>○おにぎりが「米」からできていることに関心を持たせる。</p> <p>○1年生に教えてあげようとして投げかけ、意欲を持たせる。</p> <p>○1年生には、実物の米や飯を提示し、「お米を炊いたらご飯になる」ことに関心を持たせる。</p> <p>○絵カード・説明文などを提示しそれぞれの実態にあった方法で水の量を意識してご飯を炊くことができるようにする。</p> <p>○米づくりに関心を持ち進んで観察したり稲の世話をしたりすることができる。</p> <p>○田んぼ見学では、作業をしている人はいさつなどもできるように子どもに声かけをしていく。</p> <p>○稲の育ち方に関する資料や本、虫眼鏡などを提示し、学習への意欲を高める。</p> <p>○活動の流れや稲の成長の様子や自分の学習を振り返られるように、稲作りのパネルやワークシートを作り提示しておく。</p>
	第二次	<p>ぼくたちのお米ができたよ(12)</p> <p>○稲刈りをしよう!</p> <p>○白いお米に変身させよう</p> <p>おいしいカレーを作ろう!(20)</p> <p>○「らいおんさんカレー」の本を読もう!</p> <p>○カレーの材料や作り方を調べよう!</p> <p>○みんなでカレーを作ろう。</p> <p>◎楽しいカレーパーティーをしよう!(20)</p> <p>○招待状を作ろう</p> <p>○カレーパーティーの準備をしよう!</p> <p>○カレーパーティーを行いこれまでの学習を振り返る。</p>	<p>○稲の成長を喜び、稲刈りを経験する。</p> <p>○友だちと協力して、脱穀・もみすり・精米をし、玄米から白米に変わっていく様子に気付く。</p> <p>◎食べ物に関心を持つと共に基本的な調理器具に触れ、使い方を学ぶ。</p> <p>○お話を楽しみ、カレー作りに興味を持つ。</p> <p>○カレーの中にはどんな物が入っているか知る。</p> <p>○友だちと協力してカレーを作る。</p> <p>◎友だちと協力して自分たちの力でカレーを作り、お世話になった人にふるまう。</p> <p>○必要なことをもろさず招待状を書く。</p> <p>○カレーパーティーに必要な物を考え、友だちと協力して準備する。</p> <p>○お世話になった人たちと共に、自分たちが作ったカレーを食べることを楽しむ。</p>

*評価は個人の目標に沿って行う

生活単元学習指導案②

指導者 西迫 しのぶ
高橋 幸子

- 1 学年 ひまわり学級1組・2組 10名
2 日時 平成16年10月1日(金) 9時20分～10時5分 家庭科室
3 単元 「みんなでつくろう!おいしいごはん!
～みんなでおいしいカレーを作ろう～」

4 単元について

- 食生活が多様化している現在であるが「ごはん」(お米)は私たちの生活に欠かすことのできない主食である。そのような「ごはん」を自分で炊いたり、「ご飯」を使った料理に触れたりすることは、これからの食生活における重要な経験になり、「ご飯を炊けること」は自立へ向けての大きな力となる。また、「米」を調理することは「食」に関する楽しい経験であり、食生活への関心を高めてこれからの生活を豊かにしていくことにつながる。

「ごはん」との組み合わせで子どもたちが好きな献立の一つにカレーライスがある。カレーの中のじゃがいも・にんじん・たまねぎなどは子どもたちに身近であり、栄養面からも野菜を抵抗なく食べやすいなどの利点がある。

このカレー作りを通して、社会的スキルの中の選択の力(切る野菜や道具・活動を選ぶ等)や、人とのやりとりの力をつけることをねらいとしている。また、生で食べにくい野菜や肉が、調理という一連の作業でおいしい料理になるという学習をすることにより、見通しを持って活動をする力を育てたい。結果として、「ごはん」が炊けて「カレー」が作れるようになることで、楽しく豊かな食生活の自立にもつながると考える。

- 「生活単元学習」の時間は、1組・2組合同の10人で学習している。3つの班をつくり、1年生3人を各班に位置づけさまざまとりくみをしてきた。その中で各班のリーダーを中心に1年生へのかかわりが少しずつ増えてきた。また、リーダー会を持ったり、リーダーとして行動できたことを認めたりする中で、リーダーとしての自覚も出てきた。1年生は、グループの一員であるという気持ちも少しずつ出てき、上級生の言葉かけに反応することも増えた。中学年の子どもたちも、リーダーの指示を聞いて周りに言葉かけをしたり、自分の役割を果たしたりしようとする気持ちも出てきた。しかし、活動をともにする中で、コミュニケーションがうまくとれずトラブルになることもあった。

子どもたちは、昨年度からこの大単元にとりくんでいる。ごはんを炊くことやカレー作りにも挑戦した。昨年度は材料をいっしょに煮込むカレーであったが、家で作るカレー(炒めて煮込むカレー)を作りたいという思いが出てきた。今年度は、とりくみを繰り返して発展させることにより、1年生は「食べること」や「ごはん」に興味を持ち、上級生の子どもたちは認識をより確かなものにしていくと考えた。

本学級の子どもたちは食べることに課題がある子どもが多く、給食指導を中心に食の指導を継続している。その中で、少しずつではあるが食べられるものや量が増えてきた子どももいる。また、カレーというメニューは子どもたちにとって慣れ親しんできたもので、「白いごはん」が苦手な子どももカレーをかける食べることができると食べるようになる。

- 本小単元を学習するにあたって、「今年度入級してきた3人の1年生に教えてあげよう」と投げかけ、とりくみの意欲づけにしていきたい。また、リーダー会を持ち、1年生や下学年と一緒にどのようにしたら楽しくカレーを作ることができるかを考えさせたい。

活動においては、包丁の使い方・熱いものの取り扱い方など安全面には十分に留意していきたい。さらに、高学年については、カレーの箱を見て材料と分量がわかることに気づかせ、自立に向けてとりくみたい。1年生については、自分が切った野菜がカレーになることを認識させることで、活動の意欲付けをしていきたい。

また、一人ひとりの実態や目標を基にした個別指導案を導入し、個に応じた支援を工夫していく。その支援の内容や方法については、常に介助員、教職員で意識統一して行えるようにしていく。

学習の中では、子どもの様々な実態から、音声言語と同時に動作や手話・表情など、理解の助けとなる視覚的な補助手段を使っていきたい。また、小グループでの活動の中では、カードやパネルを使い見通しを持たせたり、「順番に」や「友だちの作業を見る」などを意識させたりしたい。

活動の途中では、子どもどうしが学びあう場を確保し、必要に応じては子どもの気持ちや思いを教師が媒介することで、子どもどうしを関わらせていきたい。また、自分のいいところ・友だちのいいところに気づかせる教師の言葉かけを大切にしていきたい。また、ワークシートへの記入や学習後の振り返りなどを行い、短い区切りの中で自らを振り返る経験を重ね、自分を振り返る経験をもたせていきたい。

5 単元の目標

(別紙1 「単元における個別の目標」参照)

- 米作りの活動を通して稲の成長の様子に気づき、米についての理解を深める。
- 炊飯やカレー作りを通して、食材・道具や調理の仕方を知り、見通しを持って活動する力をつける。
- 「お米」「ご飯」「カレー」などの出てくる本や資料に親しみ、自ら調べたり学んだりすることの大切さや楽しさを知る。
- 友だちとやりとりしながら力を合わせ、ご飯を炊いたりカレーを作ったり、米の収穫をしたりする。
- 田んぼの探検や買い物などで地域にでかけ、地域の人とふれあう。

6 単元計画

(別紙2 単元計画 「みんなで作ろう!おいしいごはん!」参照)

7 本時の目標

- 友だちとやりとりしながら力を合わせ、安全に楽しくカレー作りに取り組む。
- カレーに炊飯に必要な食材や道具に触れ、その名前がわかる。
- カレー作りの順番がおおよそわかり、見通しを持って活動する。

8 準備物

歌詞を書いた紙 写真カード 大型パネル 小型パネル 順番カード

油 野菜 肉 カレールー なべ 計量カップ しゃもじ たまじゃくし さいばし

9 学習過程

学 習 活 動	指導上の留意事項を(○)・評価の観点(評)・方法を【 】自己肯定感を育む視点を(★)で表わした
<p>〈課題をつかむ〉</p> <p>1 前時を想起し、本時の活動を確認する。</p> <p>2 「カレーの歌」を歌う。</p>	<p>○前時が想起できるような資料を提示する。</p> <p>・自分が切った野菜やできあがりのカレーを見ることにより、課題をつかみやすくさせる。</p> <p>○カレーの歌の後半を歌い課題をはっきりさせるとともに、楽しい雰囲気づくりをする。</p>
<p>みんなでおいしいカレーを作ろう</p>	
<p>〈課題を追求する〉</p> <p>3 カレーの作り方の手順と火の調節を、大型パネルと師範で確認する。</p> <p>4 グループで役割を確認する。</p> <p>・みんなで順番にする活動と分担する活動をパネルで確認する。</p>	<p>○大型パネルに、活動の流れと一緒に火の調整についても示しておく。</p> <p>・強火と弱火を確認する。</p> <p>○前時に分担した内容を小型パネルにより確認する。</p> <p>・ 火をつける人・消す人・調整する人</p> <p>・ 油を量って入れる人</p> <p>・ 材料をいためる人</p>

5 小グループに分かれて材料と道具を確認する。

- ・野菜、肉、カレールー、サラダ油
- ・なべ、しゃもじ、おたま、計量カップ
さいばし

6 カレーづくりを行う。

- ・ガスコンロに火をつける。
- ・サラダ油を入れて肉をいためる。
- ・野菜をいためる。
たまねぎ～にんじん～じゃがいも
- ・水を量って入れる。
※ 調理台の上を片付ける。
- ・煮えたかどうか確かめる。
- ・火を止めてカレールーを入れる。
- ・静かにかき混ぜる。
- ・しばらく弱火で煮込んだら火を消す。
- ・味見をしてできばえを確かめる。

7 片付けをする。

〈自己を高める〉

8 本時の活動をふりかえる。

- ・リーダー中心に一人ひとりが発表する。

〈次時の予告〉

9 次の時間の活動を確認する。

- ・水を量って入れる人
- ・煮えたかどうか確かめる人
- ・ルーを入れる人
- ・焦げ付かないようにかき混ぜる人

○大型パネルで一斉に道具を確認する。

○なべなどが熱くなるので、安全面に留意する。
油はねにも注意させる。

○小型パネルで確認しながら、見通しをもって
作業に取り組めるようにさせる。

○10数えながら炒め、交代を意識させる。
(こげつかないようになべの底から炒めさせる。)

○リーダーを中心に水の分量を確認させる。

○煮えたかどうかの確かめの仕方を学習する。

- ・箸でさしてみる
- ・食べてみる

○カレーの歌の音楽を聞きながら、交代でリズム
良く混ぜるようにさせる。

評個人の目標に沿って活動することができたか。【観察】

★作業は一つひとつ確認しながら進めていき、
できたことを認め合っていく。

★子どもどうしが作業を見合い、学び合いがで
評友だちと協力し最後まで片付けることがで
きたか。

★作業内容についてがんばったところ、難しか
ったところ、友だちが工夫していたところな
どを中心に話し合い、互いのがんばりを認め
合えるようにする。

評友だちや自分のがんばりを振り返ることがで
きたか。

「生きる力を育む生活単元学習の充実」

<p>※調理台の上を片付け る。 e)煮えたどうが確かめる。 f)火を止めてカレールーを入 れる。 g)静かにかき混ぜる。 h)しばらく弱火で煮込んだら 火を消す。 i)味成してできばえを確か める。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>名前を、無ったり おもしろい、驚 たりしながら、聞 き通しを待たせ るために10秒 えて交代させる。 せて確認させる。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>名前を、無ったり おもしろい、驚 たりしながら、聞 き通しを待たせ るために10秒 えて交代させる。 せて確認させる。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>7 片付けをする。 (自己を高める)</p> <p>8 本時の活動をふりかえる。 リーダーを中心に一人ひと りが発表する。</p> <p>(次時の予告)</p> <p>9 次の時間の活動を確認す る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>	<p>①水の量に気を付 けるよう声掛け をする。 ②混ぜる時は器を 握いながらリス ムよく混ぜさせ る。</p>													
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--

IV. 授業研究における検証と考察

検証の視点1 確かな学力を育てる授業改善がなされたか。

方法① 児童に意欲をもたせる課題設定であったか。

単元構成の工夫から

単元構成にあたっては次の点に留意した。

ア 年間行事や季節の行事, 地域性を考慮した上で, 年間を通して「生活単元学習」を教育内容の中心に位置付け, それに関連させる形で教科の学習を計画していく。

イ 個々の子どもの実態を踏まえた上で, 無理なく活動できる内容にしていく。

ウ 年間を通して繰り返し経験を重ねていくことができるような単元構成にしていく。

このような単元構成をしていくことで, 子どもたちは意欲をもって学習していくことができるのではないかと考えた。(別紙2「単元計画」 別紙4「平成16年度年間学習計画」参照)

今年度も本単元は, 2つの大きな流れで計画した。

1つは, 「ご飯を炊こう! ~みんなでおいしいカレーを作ろう! ~」という「調理活動」を中心とした流れで, もう1つは, 「ぼくたちの稲を育てよう」から「ぼくたちのお米ができたよ!」という栽培活動を中心とした流れ(図1)である。この2つの学習の流れを「ごはん」という共通項でつなぎ, それぞれ小単元で構成した。(別紙2 単元計画) 2年目の取組なので, 今年度は, 調理活動を『ようこそ1年生! ~おにぎりパーティを開こう! ~], 栽培活動を『探検! 発見! でっかい田んぼ! ~本物の田んぼを見に行こう! ~]から始めることにより, 意欲をもって取組を開始することができた。

1学期には, 3回炊飯をした。1回目は, 3年生以上の児童が, 炊き方を思い出しながらご飯を炊き, 1年生歓迎も兼ねて「おにぎりパーティ」を開いた。この日は参観日で, 保護者の方と教室にシートを広げ, ピクニック気分楽しく食べた。2回目は, 6月3日の授業である。この授業では, おにぎりパーティの楽しさが「1年生にごはんの炊き方を教えてあげよう」という活動に自然につながり, 意欲的に取り組めた。3回目は, 1年生も少し流れがつかめ, 「白いご飯に大好きなふりかけをかけよう」という設定で, 進んで活動できた。



図1 田んぼで田植えをしている様子

2学期には, 2回の炊飯と2回のカレー作りを行った。炊飯は, 2回とも新米パーティ。1回は本物の田んぼで収穫したお米を分けていただいたので炊き, 2回目は収穫した稲をみんなで力を合わせて脱穀・もみすり・精米して炊いた。カレー作りも2回目の方が進んで活動できた。

このように, 単元を構成する際に, 繰り返し経験が重ねられるようにしていくことは, 子どもたちが「次はこうすればできる」と見通しをもって学習に取り組むことにつながり, 自ら考え行動しようとする力を育てるために有効であると考えた。また, 2回目のカレー作りでは, 買い物も自分たちで行い, 材料をそろえる部分からの学習もできて良かった。

3学期も, 繰り返しを大切にしながら, 内容の発展も図り, カレー作り等の取組を続けていきたい。

必要感をもたせる場の設定から

お米についての取り組みは, 本年度が2年目になる。今年度, 3人の1年生が入級してきた。そのため, いろいろな活動を, 「1年生に教えてあげよう」と投げかけた。すると, 1年生に教えてあげることに他の7人の子どもたちは大変意欲を示したので, この投げかけによる場の設定は有効であったと言える。

この投げかけを2学期も続けることで, 上級生は上級生としての自覚がよりいっそう育った。「たのむよ。」の言葉により, はりきって1年生と関わる様子が見られた。また, 1年生についても, リーダーの言葉かけで, 活動することが増えてきた。

<考察>

無理のない活動を繰り返し行っていく単元構成と「1年生に教えてあげよう」という設定は、児童の意欲づけに有効であった。

方法② 指導方法の効果的な工夫が学習の理解を深めるために有効であったか。

個に合った指導の工夫から

個々の実態をもとに個々の単元全体の目標を定めると同時に、場面ごとに個々の支援の方法を考えていった。教師とともに活動する児童、教師の言葉かけで活動できる児童、絵カードで確認しながら行動できる児童など、児童の実態をもとに支援の方法を工夫した。個別の目標を設定し、個別の支援を計画していくことで、一人ひとりに合った支援をすることができたと考える。

例えば「歌を歌う。」という学習活動である（別紙3 個別の指導過程2 参照）。学習内容をわかりやすくした歌を提示し、学習内容への見通しをもたせると同時に学習への意欲を高めるために学習の始まりにしばしば取り入れた。その場合『歌詞カードの前に行き、歌詞をなぞりながら歌うように促す。』『米・洗う等のキーワードとなる言葉を手話で表現し炊飯することを意識できるようにする』『歌っている部分を指差しどこを歌っているかわかるようにする。』など、個に応じて具体的な支援を計画した。音声によるコミュニケーションを苦手とする児童、焦点化しないと活動の意味がとらえにくい児童など、児童の実態に応じてこのような具体的な支援を行うことにより、「歌を歌う」ことができ（図2）、学習への見通しを持ち、



図2 なぞりながら歌っている児童

意欲を高めることができた。

今後も個々の実態把握につとめ、適切な支援のあり方を工夫していかななくてはならない。

小グループによる学習から

学習を進めていく中で、小グループによる活動を仕組んでいくことは、子どもたちの関わりを作っていく上で有効ではないかと考えた。3～4人の小グループの中では、役割を分担し、関わり合いながら仕事を進めなければならない。6月3日の授業では、「1年生に教えてあげよう」という設定から、3つのグループは、1年生を中心にした形で、子ども達と相談しながら決めていった。そして、3人の5・6年生には、リーダーとして成長して欲しいというねらいから、各グループに高学年のリーダーを位置づけ、グループの名前をリーダーの名前にした。そして、より関わりが深まるように日直等の生活班も同じ班にした。その中で、1年生に声を掛けたり関わりながら学習したりすることが少しずつできるようになった。

また、小グループでは、自分の役割が多くなり、実際に活動することを通して力を付けていくことができる。作業する力をつける上でも、小グループによる学習は有効である。

パネルや写真カードの活用から

子ども達が課題を把握し、見通しをもって活動できるようにいくつかのパネルや写真カードを準備した。（なお、視覚障害のF児については、必ず音声で知らせながら触って確認するよう配慮した。）

1つめは（図3）、①お米を量る②お米を研ぐ③水を入れる④スイッチを入れる、というご飯を炊く過程を示す4枚のパネルである。最初にこのパネルを並べて作業の順番を確認した。このパネルを見ながら「ごはんたきの歌」（自作）を歌うことでより確認できたと思われる。

2つめは、道具確認のための4枚の写真カード（図4）



図3 ご飯を炊く過程を示す4枚のパネル



図4 道具確認のための4枚の写真カード

である。計量カップ・ボール・ザル・炊飯器の4枚の写真カードと実物をマッチングさせ、名前も確認していく。リーダーが中心となって1年生に教える際に大変役に立った。

3つめは、メンバーの名前とその作業内容を示したパネル(図5)である。作業が終わるごとに、リーダーが、作業の回数を示した数字を×印で消していく。子ども達にとっては、作業に見通しをもつ上で有効であり、落ち着いて作業を進めることにつながった。

また、カレー作りの時も、同様の4種類のパネルや写真カード(図6)を用意した(図6①～④)。①材料(じゃがいも・にんじん・たまねぎ)の下ごしらえの仕方についてのパネル。②③いため方についてのパネル(②大・全体指導用1枚、③小・グループ用3枚)、④カレー作りの材料と道具の絵カードである。やはり、そういう視覚的支援があると進んで活動しやすい。

①については、材料を洗ったり切ったりする際に役立った。手順をスモールステップで示すことが大切である。

②③については、子ども達と一緒に作成していった。調理の流れに沿った火の大きさを学習し、それを視覚的に表示したことは、それを把握し、作業に生かすのに大変有効であった。

また、③については、マッチングを基本として子どもの文字・ことばの獲得に国語の学習として発展していった。

④については、材料や道具の準備の時に大変役に立った。このカードがあることによって、自主的に、準備できる。

<考察>

個々の児童の実態をもとに一人ひとりに合った目標を設定し、そのねらいのもとに小グループを編成したりパネルや写真カードを準備したりする等、必要な支

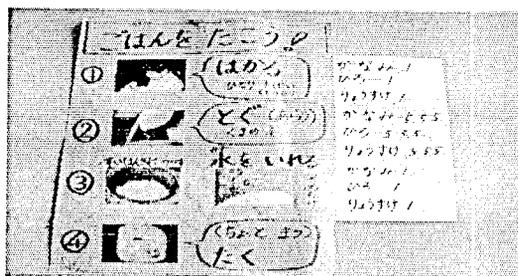


図5 メンバーの名前とその作業内容を示したパネル

援をしていくことは児童の学習理解を進めるのに有効であった。

方法③ 達成感を育て、次の課題へつながる評価がなされていたか。

教師の言葉かけから

達成感を育てるためには、個々の子どもの様子をよく観察し、小さなことでもできたことを認める言葉かけが大切である。授業前にはいつも、T1・T2で役割を分担し、子どもの課題をふまえて適切な言葉かけをしようと打ち合わせをしている。授業の中でも、すりきり1カップが上手なJ児を誉めたり、それぞれの作業が終わるごとに「よくできたね。」「順番に頑張っているね。」などと言葉を掛けたりした。しかし、児童の予期せぬ行動もあり、3つのグループを2人では、十分に回ることはできなかった。グループの活動を落ち着いて観察し、的確な言葉かけをしていくことが今後の課題である。

<考察>

教師の言葉かけは、達成感を育てるために有効であるが、充分にすることができなかった。どのようにすれば次の課題へつながる評価をすることができるか考えていかななくてはならない。

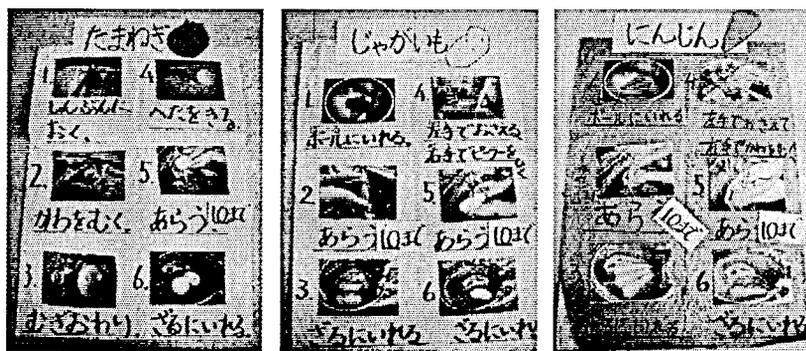
検証の視点2 単元や授業において、自己肯定感を育む学習活動の場を設定することにより、児童の変容が図られたか。

方法① 自己を肯定的にとらえる学習活動の場を設定し、有効に活かされていたか。

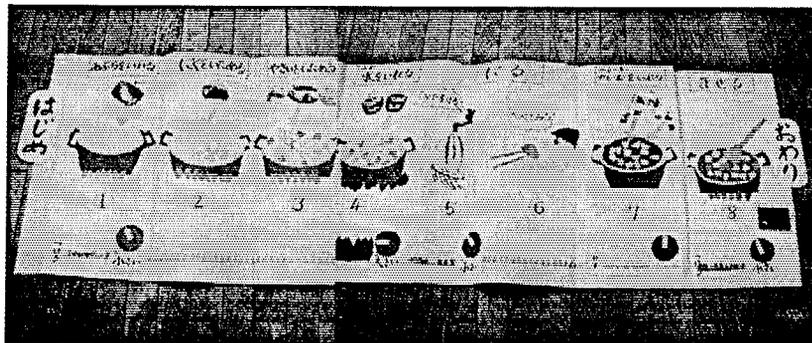
作業を見合う場の設定から

授業の中で、子ども同士が作業を見合う場を設ける

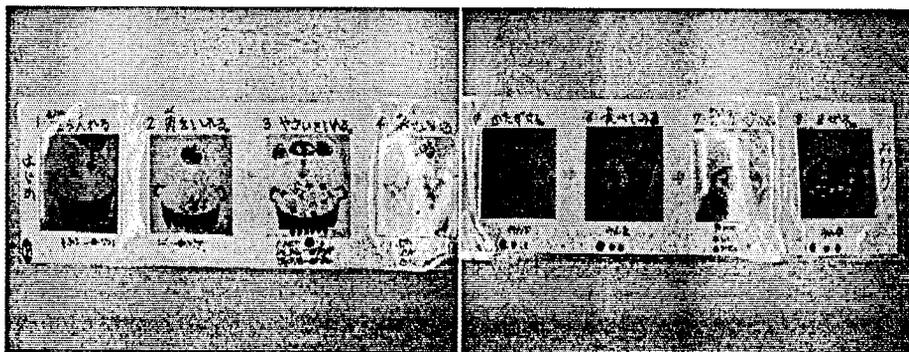
①



②



③



④

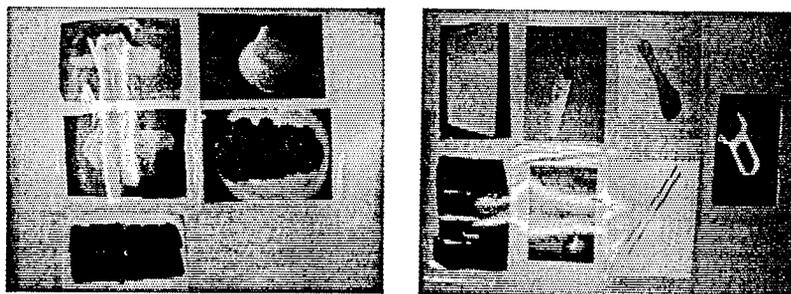


図6 カレー作りの時に用意したパネル・写真カード①～④

予定だったが、前段の確認に時間がかかってしまい、そういう場がもてなかった。今後は見せ合い認め合う場を大切にしていきたい。

振り返りの場の設定から

自分の良さ、友だちの良さに気づき、自分を伸ばし互いに伸びていくためには、一人ひとりが自分の目標に即して自分を振り返り、つかんだことを次の学習につなげていくための学習の場・振り返りの場が必要であると考えられる。しかし、本学級の児童は自分や自分たちの活動を振り返り次に生かしていこうとする意識をもちにくい実態にある。自分の活動を振り返るという意識がもてるように、次のような支援を学習場面に応じて取り入れることを考えた。

ア 具体的な目標をたて、短い区切りで振り返る場を設ける。

- ・～ができたよ、～ができないよ。
- ・～が楽しかったよ、～がむずかしかったよ。

イ 具体的な活動の内容を振り返る場を設ける。

- ・～をしたよ。
- ・〇さんは～をしたよ。

ウ 自分の学習の足あとが残していけるようなワークシート・ふりかえりカードを用意し記入する場を設ける。

- ・写真や資料の添付をする。
- ・気づき、感想などの記録を残す。

エ 自分や友だちの活動が振り返りやすいような掲示物を提示する。

- ・日程表やカード
- ・学習の流れを示した掲示

今回の取り組みでは、本時の最後にふりかえる時間をもったが、あまり時間がなく、十分にふりかえるこ

とができなかった。そのため、次の日に写真を添付したワークシートを使ってふりかえりをした。その中で一人ひとりの頑張りを確認することができた。

<考察>

ワークシートによるふりかえりの場を設定することは、頑張ったことを確認し合う場となり、自己肯定感を育むことにつながった。授業時間内に作業を見合う場を設定すると、より有効である。

方法② 授業の工夫改善が、自己肯定感の育成につながったか。

達成感が味わえる授業計画から

ご飯を炊く準備をしたら、必ず炊いたご飯をおいしく楽しく食べる計画を立てた。4月から5回ご飯を炊き、2回カレーを作ったが、どの回も上手に調理でき、みんなでおいしく食べた。このことは、達成感につながり、次への意欲につながると考える。

子ども同士の関わりを深める支援から

それぞれの子どもの表現方法が異なり、相互理解や相互のかかわりが難しい児童の実態の中で「他者との関わり」を持たせていくためには、子ども同士を関わりさせるための共通のコミュニケーション手段を設定する必要がある。本学級では、音声言語だけでなく動作や手話的表現、表情等を使って、子ども同士の気持ちや思いが伝え合えるよう支援をした。そのことが、お互いの気持ちが分かり、認め合える関係作りにつながり、ひいては達成感につながると考える。

どの授業でも、教師と子ども・子どもと子どものコミュニケーションにこのことが生きていたと考える。

<考察>

達成感が味わえるような授業計画を設定すると共に、そのような授業のベースとして、コミュニケーションがとり易くなるような配慮を充分していくことで、初めて児童の意欲や自己肯定感を育むことができる。

方法③ 単元全体を通してまたはある一定期間において、児童が自分の価値や変容に気がつくことができたか。

6年生の変容から

まだ取り組み半ばであるが、6年生のI児とJ児に



図7 写真カードを使ったふりかえりのワークシート

(演奏順) 「踊る大捜査線」ハイライト

①	
②	<p>A</p>
	<p>B</p>
③	<p>C</p>
④ ⑤	<p>D</p> <p>E</p>
⑥	<p>F</p>
⑦ ⑧ ⑩	<p>G H</p>
⑨ ⑫	<p>I</p>
⑬	
⑭	<p>O</p>

おわり

- 青 ソ
- 赤 ラ
- 黄 シ
- 金 ^bシ
- 銀 ト
- 黄 ^井ト
- 青 レ
- 赤 ミ

ピアノに貼ったシールの色と形に対応させ、楽譜には色鉛筆で色丸をかいた。

(4) ... 休みの拍数
 3拍伸ばす

図8 J児の合奏参加のための楽譜の工夫

リーダーとしての自覚が感じられる。自分が1年生に声を掛けなくてはと絶えず気にしているI児、同じグループの1年生や下学年に「座ろう」と促したりするようになったJ児。今まで指示されることの多かったJ児であったが、リーダーとして考え行動できる場面が増えた。頼りにされることは大きな成長につながる。今後もその力を引き続き伸ばしていきたい。

<考察>

6年生の変容から、頼りにされることと成長との関わりは大きいといえる。今後も成長した面をその児童にしっかり伝え自信をもたせていきながら、他の児童にも変容が広がっていくよう取り組んでいきたい。

<J児の合奏参加～ピアノ演奏～への取組>

J児は視覚による色や形の弁別に優れた児童である。本小学校では、毎年6年生になると、金管楽器を含む鼓笛隊を編成し、練習に励み、諸行事でその成果を発表する。J児の担当は、ピアノになった。通常の楽譜を読んで演奏することは、非常に困難であった。そこで、色の弁別が得意なJ児の特性を生かして、ピアノに17色の色シールをはり、けん盤を色分けし、簡単にした楽譜をそのシールと同じ色の丸で書き直した。すると、J児は鍵盤に貼ってあるシールの色とマッチングしながら抵抗なく「楽譜」にそってピアノで吹くことができた。音の長さは、その丸の色を尾びれのように伸ばし、その伸ばしたところに、伸ばす拍の数を書くことと理解できた。また、「アイーダ」「木星」のような繰り返しのある部分については、左端に順番を示す番号を書き入れることにより、繰り返しも自分で把握して、J児用の五線のない手作りの楽譜を元にスムーズに演奏できた。11月末の学習発表会では練習してきた「若者たち」「アイーダ」「木星」「踊る大捜査線ハイライト」の4曲を完璧に演奏しきり、大変満足した表情をしていた。J児に合った支援をすることで、J児は合奏に参加でき、自己肯定感を高めることができたと考えられる。今後もこのような支援を進めていきたい。

V 成果と課題

- 繰り返し行っていく単元構成をしたことと、個人の目標を設定し支援を計画したことで、確かな学力・生きる力につながる意欲が少しずつ高まってきた。
- 小グループでの活動を仕組んだり、常に多様なコミュニケーション方法を取って授業をすることは、子ども同士の関わりを増やし、コミュニケーションの力を育てることにつながった。言葉のない児童が、身ぶりによって、グループをまとめたり、「指示」することが可能になったことは、音声言語に頼りがちになる授業をユニバーサルデザイン化し、手話、動作、パネル・写真カードの使用を日常的に行った成果である。
- 多様なコミュニケーション方法を日常的に授業で行うことにより、それぞれの特性にあったコミュニケーションスタイルを獲得しているが、この記号化によって、相互交渉のツールとしてだけでなく、自己調整機能としてのツールとしても役立っている。聴覚障害児だけでなく、自閉的傾向があるJ児も精神的動揺や混乱を身ぶりによって自己コントロールしている姿が頻繁に見られた。
- 達成感が味わえる授業計画を立て、授業の後、必ずふりかえりの場をもつことで、「できたよ。」「頑張ったよ。」という自己肯定感を育むことにつながった。ふりかえりの場では、指導者が音声言語だけでなく、写真カードを示し手話を伴いながら「話しかける」ことを心がけた。様々な特性をもつ児童が、それぞれの特性にあったコミュニケーション手段（音声言語、手話や身ぶり、写真のポインティング等）で「ふりかえり場面」に参加できるようにした。多様な児童が一堂に会する場面では、ユニバーサルデザイン化した取組が有効である。